様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007 年度　～　2009 年度
課題番号：19520196
研究課題名（和文）　中世後期イングランドにおける俗語文学の発達と世俗的精神の成熟に関する比較研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study on the Development of Vernacular Secularity in Late Medieval England

研究代表者
小林　宜子（KOBAYASHI YOSHIKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：　80302818

研究成果の概要（和文）：12 世紀半ば以降、イングランドを含む西ヨーロッパ各地の世俗君主の宮廷において、アリストテレスやキケロに代表される古典古代の政治倫理思想の影響を受けながら、世俗社会の政治構造やその倫理的基盤を俗語で論じ、俗語に備わる表現能力を政治理論や社会思想の領域でも最大限に高めようとする努力が盛んに行なわれるようになった。本研究は、14 世紀末から 15 世紀半ばまでのイングランドにおける俗語文学の発達を、こうした汎ヨーロッパ的な思想的潮流の一環として再検証した試みである。

研究成果の概要（英文）：From the mid-twelfth century onwards, various efforts were made in the courts of secular rulers in Western Europe to translate or adapt the political and ethical works of such ancient philosophers as Aristotle and Cicero and, in doing so, to elevate vernacular languages into proper vehicles for discussion of the political structures and moral foundations of secular society. This study resituates Middle English literary texts produced in the late fourteenth and early fifteenth centuries within the context of such pan-European intellectual endeavors to cultivate “vernacular secularity.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学、比較文学、中世英詩、中世フランス語文学、君主論

１．研究開始当初の背景

2004年7月に開催された国際チョーサー学会の基調講演において、中世後期イングランドにおける vernacular secularity の発達について、今後、体系的な研究が必要であるとの指摘がなされた。vernacular secularity という表現は、近年めざましい成果を挙げている vernacular theology（「俗語神学」）と呼ばれる研究領域への言及を含み、これと対を成し、かつこれを補完するものとしての世俗主義の研究の必要性を示唆したものであった。「俗語神学」とは、14 世紀半ばから 15 世紀半ばまでの時期に英語を用いて自らの幻視体験や観想生活に関する記録を留め、信心生活の手引書を表した一群の神秘主義者たちの霊的著作を主として意味している。これらの著作家たちは、既存の教会制度の周縁に身を置き、信仰や学問的叡智に関わる一切の権威であったラテン語の使用を避けて、世俗の言語である英語によって、一般信徒を含む広範な読者層に向けて霊的教えを説いている。近年発表された俗語神学に関する数々の論考の中で、英語をラテン語に並ぶ知と信仰の言語にまで高めた彼らの功績には高い評価が与えられている。

vernacular secularity の研究の提唱者は、こうした俗語神学研究の成果に敬意を表しながらも、中世後期イングランドにおける文学言語としての英語の発達を考察し理解するためには、それだけでは不十分であると指摘する。12 世紀半ば以降、イングランドを含む西ヨーロッパ各地の世俗君主の宮廷において、世俗社会の政治的構造とその倫理的基盤について俗語で論じ、俗語に備わる表現能力を政治理論や社会思想の領域でも最大限に発揮させようとする試みが盛んに行なわれるようになった。俗語で書かれたこれらの哲学的著作の世俗主義的な傾向こそが vernacular secularity という概念の中核を成すものであり、Langland, Chaucer, Gower といった著名な詩人たちを輩出した 14 世紀後半のイングランドの文学的状況を、こうした汎ヨーロッパ的な思想的潮流の一環として捉えるべきだというのが、上記の提唱者の主張である。

本研究はこの提唱に応える形で着想されたものである。

２．研究の目的

vernacular secularity の問題をめぐっては、これまで、フィリップ四世治下のフランスで書かれた政治倫理に関する一群の著作が、14 世紀末のリチャード二世治下に活躍したイングランドの俗語詩人たちに多大な影響を与えていたことが指摘されてきた。本研究では、こうした比較研究の可能性を具体的な事例に即して追求しつつ、比較の対象をさらに広げて以下の三つのテーマに沿って考察を進めた。

(1) 俗語文化が開花した舞台の一つとして、12 世紀のイングランド国王ヘンリ二世の宮廷文化を研究対象のうちに含め、そこで創出された *romans antiques* と呼ばれる複数のフランス語の詩作品と、それらが 14 世紀末から 15 世紀前半にかけての英詩人たちに与えた影響について考察した。古典古代の著作から想を得た *romans antiques* の中でも、とりわけ Benoît de Sainte-Maure が書いた *Roman de Troie* が Chaucer, Gower, Lydgate 等に与えた影響は重要である。本研究では、同じくヘンリ二世の治世にキケロ等の古典作家を引用しながら有機体的政治社会観を自著 *Policraticus* の中で展開した John of Salisbury の思想と比較しながら、*romans antiques* に表明された君主論や国家観を分析し、中世末期の英詩人たちがそれらをどのように継承し、変容させていったかを考察した。

(2) 国王に即位する以前のフィリップ四世に献じられた Aegidius Romanus のラテン語の君主論、およびフィリップ四世治下で教皇権からの王権の独立を主張したラテン語による政治的論争書 *Disputatio inter clericum et militem* を具体的な研究対象として選び、前者の影響のもとに君主教育について論じた John Gower の *Confessio Amantis* 第七巻、および Thomas Hoccleve の *The Regement of Princes* を、各々を取り巻く歴史的状況に照らしながら分析した。併せて、リチャード二世の時代に地方の有力貴族であった Thomas Berkeley の要請を受けて、*De regimine* と *Disputatio* の双方を英語に翻訳した John Trevisa の活動にも注目し、その政治的・思想的意義に留意して考察を進めた。

(3) シャルル五世の王宮と中世末期のイングランド国王の宮廷とをつなぐ重要な人物として、イタリア出身の女性作家 Christine de Pizan に焦点を絞り、王権や政治倫理の問題を扱った彼女の複数のフランス語の著作が、15 世紀のイングランドで Thomas Hoccleve 等によって英語に翻訳された経緯

とその意義を明らかにすべく、該当する英訳テクストの分析を行なった。

３．研究の方法

14 世紀末から 15 世紀末にかけてのイングランドにおける俗語文学の興隆と世俗的精神の発達について比較文化的視点から考察を行なうため、前項で述べた三つの研究テーマのそれぞれに一年ずつを費やし、以下の方法で分析を進めた。

(1) 西ヨーロッパの中でも俗語文学が比較的早い時期に成熟し、イングランドを含むヨーロッパ各地の文芸に多大な影響を与えた 12 世紀イングランド国王ヘンリ二世の宮廷文化について考察した。アンジュー地方の出身で、ヨーロッパ大陸に広大な領土を有したヘンリ二世の大陸の宮廷では、古典古代の作品から着想を得て書かれた Roman de Thèbes, Roman de Troie, *Roman d'Enéas* などの *romans antiques* が創出され、これらの詩作品、とりわけ Benoît de Sainte-Maure がトロイア戦争をテーマに執筆した *Roman de Troie* が、中世後期イングランドの数々の英詩に影響を与えることになる。本研究では、これらの詩群に含まれた君主論や社会観に関わる叙述に焦点を絞り、その中に世俗主義の形成のプロセスがどのように辿れるかを、同時代の思潮に照らして検証した。

(2) 教皇ボニファティウス八世と対立し、国王の支配する領土はキリスト教的共同体の単なる一領域ではなく、自立的な国家であると主張した 13 世紀のフランス国王フィリップ四世の周辺で王権のあり方を論じた二篇の論文、Aegidius Romanus の *De regimine pricipum* と作者不詳の *Disputatio inter clericum et militem* を取り上げ、世俗国家の自立性への主張を含む萌芽的な思想的著作としてこれらを位置づけたうえで、その影響下で書かれた John Gower, Thomas Hoccleve, John Trevisa の作品を分析した。

(3) 14 世紀のフランス国王シャルル五世の宮廷と深い関わりのあった女性作家 Christine de Pizan が著した一連の政治的著作(*Epistre au dieu d'Amours*, *Livre des faits d'armes*, *Epistre Othea*, *Livre de corps de policie*) に焦点を絞り、それらが書かれた背景と、それらを基にして 15 世紀のイングランドで執筆、出版された英訳作品の思想的意義を考察した。

４．研究成果

ここでも、上記 2. に記した三つのテーマに沿って、それぞれの研究成果を報告する。

(1) 12 世紀のヘンリ二世在位中に書かれた三篇の *romans antiques* を主な研究対象とし、その中に含まれた君主論や社会観に関わる叙述を分析するにあたって、まず *romans antiques* の著者たちがキケロやウェルギリウス、オウィディウス等の古典作家への造詣を深める舞台となったと思われる 12 世紀フランスの司教座聖堂付属学校における学究環境や、彼らの学んだ文法や修辞学の具体的な教育内容について調査し、彼らの詩作活動に影響を与えたと考えられる Baudri de Bourgueil のラテン語作品についても調査を行なった。と同時に、*romans antiques* の著者たちと同様のラテン語教育を受けた *clercs* が、ヘンリ二世の王宮に書記や行政官として登用され、世俗主義の発展や政治思想の形成に寄与していたことを作品解釈の重要な手掛かりとして考察しつつ、そうした社会的文脈が個々の *roman* にどのように映し出されているかを分析した。*Romans antiques* に含まれる叙述の一部が君主論としての性格を備えていることは、すでに先行研究によって指摘されている。本研究はそうした叙述がカロリング朝以来の「君主の鑑」の伝統に根ざしたものであることを確認し、また同時代に書かれた政治倫理に関する代表的著作、John of Salisbury の *Policraticus* や Giraldus Cambrensis の *Liber de principis instructione* の内容と通底するものであることを証明した。さらに *romans antiques* との直接・間接の影響関係が指摘されている中世後期イングランドの詩人たちの作品(Geoffrey of Chaucer の *Troilus and Criseyde*, John Gower の *Vox Clamantis* と *Confessio Amantis*, John Lydgate の *Troy Book* と *Siege of Thebes*)を考察対象に加え、これらの詩人たちが各々の社会的地位や思想的傾向、王宮への関わり方に応じて、*romans antiques* に表明された君主観を独自の方法で敷衍させ、それらに修正を加えていることを明らかにした。

(2) 13 世紀のフランス国王フィリップ四世の周辺で王権のあり方を論じた二篇の論考、Aegidius Romanus の *De regimine principum* と作者不詳の *Disputatio inter clericum et militem* を取り上げ、世俗国家の新しい自立性への主張を含む萌芽的な思想的著作と位置づけたうえで、まず Aegidius Romanus の著作が 14 世紀イングランド国王リチャード二世の側近であった Sir Simon Burley の蔵書中に含まれていた事実に注目し、Aegidius Romanus が描出した君主の理想像がリチャード二世の統治スタイルにいかなる影響を与えたかを検証した。次に、リチャード二世の

時代に Aegidius Romanus の著作を参照して書かれたとされる John Gower の *Vox Clamantis* 第六巻、および *Confessio Amantis* 第七巻を考察の対象とし、そこから窺える Gower 自身の思想的傾向と、当時の社会的状況が彼の君主論にいかなる影を落としていたかを分析した。その際、Gower が 1381 年の農民一揆以降、国家の政治的・社会的危機を憂い、国王と国民に語りかける預言者としての「声」を獲得していった過程を辿りつつ、Gower の政治的発言の思想的内容のみならず、その修辞的特徴にも留意しながら分析を進めた。また時代を下って、14 世紀初頭のヘンリ四世の治世にも目を向け、王宮の下級官吏であった Thomas Hoccleve の詩 *Regement of Princes* の中に Aegidius Romanus や Gower の著作の影響の痕跡を辿り、ヘンリ四世の王権の基盤の脆弱さが問題となっていた時期に、先人の著した君主論が Hoccleve にとって切実な重要性を有するものとなっていたことを確認した。さらに、王宮から遠く離れたグロスターシャーで、Thomas Berkeley の依頼により上記の二篇の論文を英訳した John Trevisa の活動を考察対象とし、その翻訳活動の思想的意義を分析した。具体的には、Thomas Berkeley が当時、リチャード二世と対立する諸侯側の陣営に属していたことに注目し、教皇権からの王権の独立を主張した 13 世紀の著作が、王権への批判を強める有力貴族の政治的発言権の強化のため、思想的な武器として機能していたことを証明した。

(3) Christine de Pizan がシャルル六世治下に国王と諸侯の対立が基で生じた政治的混乱を憂いながら著した一連のフランス語の著作に焦点を絞り、それらがヘンリ四世治下の政情不安、バラ戦争の勃発、対仏戦争における最終的敗北など、激動の時代を迎えていた 15 世紀のイングランドで英訳された経緯を分析した。具体的には、Hoccleve の *Letter to Cupid*, William Worcester 訳とされる *The Book of Noblesse*, Lord Rivers 訳とされる *The Body of Polycye*, William Caxton の *The Book of Fayttes of Armes and of Chyvalrye* を考察対象として選んだ。これらのテクストを分析する中で、まずはシャルル五世の後援を受けて仏語訳されたアリストテレスの政治学関連の著作が Christine の政治倫理思想に影響を及ぼしていたこと、また John of Salisbury の政治社会観の影響を受けながらも、彼女がそこに世俗主義的観点から修正を加えていたことが確認された。さらに、王権や政治倫理の問題を扱った彼女の複数のフランス語作品が英訳される過程で、それらが中世末期イングランドの俗語文化の発達や世俗的精神の成熟に少なからず貢献したことが証明された。

以上の研究はすべて、ラテン語やラテン語文化に対抗するものとしての俗語文化の発達を辿ることが主要な目的であったが、イングランドにおける俗語文化の形成が、フランス語文献の英語への翻訳という要素を内包しており、フランス語がすでに確立しつつあった学問的・詩的優位性に対する挑戦という意味合いがその中に込められていることを本研究では重視した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
小林宜子、「Chaucer と叙事詩の伝統――英語による poesye 創出の試み」、Proceedings of the 79th General Meeting of English Literary Society of Japan, 査読無、 2007 年、 pp. 173-175.

〔学会発表〕（計５件）
①小林宜子、「Brewer 教授の Gothic Chaucer」、日本中世英語英文学会第 25 回大会、2009 年 11 月 29 日、慶應義塾大学日吉校舎。

②Yoshiko Kobayashi, “London as a Widowed City in John Gower’s *Vox Clamantis*,” New Chaucer Society XVI International Congress, 18 July 2008, Swansea, Wales, UK.

③ Yoshiko Kobayashi, “The Enchanted Cloak of Briseida: Border-Crossing and Translation in the *Roman de Troie* and *Troilus and Criseyde*,” 2007 MEMESAK International Conference, 10 November 2007, Seoul, South Korea.

④小林宜子、「Chaucer と叙事詩の伝統――英語による poesye 創出の試み」、日本英文学会第 79 回大会、2007 年 5 月 20 日、慶應義塾大学三田校舎。

⑤ Yoshiko Kobayashi, “Gower in the Thracian Woods: The Myth of Philomela and the Search for a Poetic Voice in the *Vox Clamantis* and the *Confessio Amantis*,” 42nd International Congress on Medieval Studies, 10 May 2007, Kalamazoo, MI, USA.

〔図書〕（計３件）
①Yoshiko Kobayashi, “The Voice of an Exile: From Ovidian Lament to Prophecy in Book 1 of John Gower’s *Vox Clamantis*,” in *Through a Classical Eye: Transcultural*

and Transhistorical Visions in Medieval English, Italian, and Latin Literature in Honour of Winthrop Wetherbee, ed. R. F. Yeager and Andrew Galloway (Toronto: University of Toronto Press, 2009), pp. 339-362.

②高宮利行・松田隆美編『中世イギリス文学入門――研究と文献案内』(小林宜子、I-17「ジョン・ガワー」、II-7「中世イギリス文学批評の現在」、II-10「比較文学の可能性と方法論」を分担執筆)、雄松堂出版、2008 年、総ページ数 454p.

③Yoshiko Kobayashi, "Principis Umbra: Kingship, Justice, and Pity in John Gower's *Confessio Amantis*," in *On John Gower: Essays at the Millennium*, ed. R. F. Yeager (Kalamazoo, MI: Medieval Institute Publications, 2007), pp. 71-103.

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　宜子 (KOBAYASHI YOSHIKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80302818

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：